

平成 28 年度第 1 回弘前市立郷土文学館運営委員会会議

平成 28 年 12 月 20 日（火） 15：00～

弘前図書館 2 階会議室

出席者：仁平委員長、藤田委員、木村委員、齋藤委員（浅瀬石委員欠席）

文学館側：伊藤館長、柴田館長補佐、櫛引企画研究専門官、田澤総務係長

	(委嘱状交付、教育長挨拶、組織会省略)
委員長	それでは本日提案されております案件について、事務局より説明をお願いいたします。
	案件 1：平成 28 年度郷土文学館の事業実績について 案件 2：郷土文学館の利用状況について 案件 3：平成 28 年度郷土文学館資料収集状況
委員長	それでは、ただ今の説明に対し、ご質疑・ご意見等ございませんでしょうか。
委員	寄贈の本というのは、図書館と郷土文学館で相互に利用できる状況でしょうか。
館長補佐	郷土文学館で寄贈頂ければ郷土文学館の管理台帳に載ります。図書館に寄贈頂ければ図書館となります。利用したい場合は、書類上の手続きを経て一定期間貸し出すという形です。場合によって、図書館にあるよりは郷土文学館にあるべきだという物は、移管の手続きを取ることもあります。
委員長	来館者に関してですが、ある時期から団体の扱いがなくなったということですが、どんな理由でそうなったのか、その後に影響があったのかどうかという点についてお話し頂ければと思います。
館長	その件に関しましては把握しておりませんので、分かり次第お伝えしたいと思います。
委員長	はい承知しました。
委員	収入が少なくなっておりますけれども、文学館で一定の経費が必要だと思っておりますが、その辺はどうなっているのでしょうか。

館長補佐	入館料は年間約30万円という数字まで減額になっています。新たな指定管理がスタートし、更には委員の皆様方のご意見も頂戴しながら、今後収入増額については検討課題とさせて頂ければと思います。
委員長	今の件に関して、他にご意見無いですか。
委員	確認ですが、予算は図書館全体から捻出しているという事によろしいのでしょうか。
館長補佐	教育費としては一緒になりますが、予算の作りとしては図書館分・郷土文学館分と別れた予算になっています。 ちなみに総額をお知らせいたします。予算額として、一般経費と企画展という形で分けていますが、一般経費で約1,800万、企画展として約160万、総計で約2,000万ということになっています。主に一番大きいのは人件費という構成割合になっております。申し上げたのは平成27年度決算です。
委員長	常設展示作家に関する購入資料図書で、購入する・しないの基準はあるのでしょうか。
専門官	部門を総合して2月頃に購入しています。と申しますのは、昨年度非常に良い資料を年度末に買いまして、予算内で買えるか買えないかという状況がありました。
委員長	他はいかがでしょうか。 よろしいようでしたら、この案件の1から3につきましては以上といたしたいと思います。 それでは次に、案件4につきまして事務局より説明お願いいたします。
	案件4：郷土文学館の指定管理について
委員長	ただ今の説明に対し、ご質疑・ご意見等ございませんでしょうか。
委員	私が気になったところを是非この場で申し上げておきたいと思いません。 弘前が多分津軽の中で多くの文学者を輩出している土地だということ、その地にある郷土文学館という観点から、生み出した土地としての姿勢を運営に組み込んでいかなければと思います。その一つとしては、この中ではあまり触れられていないと思うのですが、文学館としての調査研究機能は指定管理になったとしても維持、むしろ発展させていくべきであろうと考えております。一例を申し上げますと、最近私も他からの指摘を頂いて思ったのですが、現在文学館で開催されております福士幸次郎展の図録の中に結構注目すべき記述があったのです。

	<p>それは、福士幸次郎の業績です。口語自由詩の先駆者という肩書で紹介されているのですけれども、それを象徴するフレーズが、萩原朔太郎の「福士幸次郎の『太陽の子』がなかったら、私の『月に吠える』はなかった」ということなのです。この言葉自体はよく知られているらしいのですが、それが一体どこが起源なのかということがあまりよく知られていなかったという話を伺いました。最近私が指摘を受けたのは、しっかり調べて文字に残されているのが今回の幸次郎展の図録だということです。そういう意味でも地元でなければそこまで力を入れない、地元だからこそ発信できるスタンスがあると気づかされました。指定管理が導入されるとやはり収益がどうだとか、入館者数がいくりに設定されてこれぐらい入れたい、という話がどうしても先走るのではないかということがありますけれども、それとは一線を画した部分で、基本的な部分は、文学研究の世界で基礎研究という言葉があるのかどうかは別にして、ものすごく大切だと思います。その意味でも、地元弘前にある郷土文学館ならではの視点に基づいた調査研究は大変必要だと思いました。</p>
委員	<p>朔太郎の幸次郎に対する話は、地元が最初ではありません。国文学のいくつかのもので既に発表されています。委員のおっしゃった主旨というのは私もそう思います。地元の研究が大変に重要だということです。ただ、今回の図録というのは、確認はしていませんが、県の近代文学館の方でまとめられたものではないでしょうか。</p>
専門官	<p>弘前でまとめています。県の近代文学館でまとめたものはかなり基づいています。</p>
委員長	<p>ご提案をまとめますと、今回の指定管理者からの提案で出ているような外側へ発信する路線、それ自体の重要性はもちろん疑いないとしたうえで、同時にまたそれを支えるベースとなるような基本的な研究路線、基礎研究という言葉がありますけれども、そこの部分の重要性がないがしろになってはいけないと思います。その成果が図録ということになるのだと思いますが、同時に基本的な研究、しっかりとした文学的なものを押さえるということと、外へ発信するということは恐らく矛盾することではないだろうと思います。私も大学の授業のオープニングで申し上げることは、青森というのは本州の先端、北端であると共に、常に文学の先端を生み出し続けた場所である、という話です。福士幸次郎がそうですけれども、更には福士幸次郎が扱った方言詩というのは正にあの時代においては極めて新しかったはずで、一種のアヴァンギャルドだったというところがありますし、それはもちろん寺山修司のある種地方的なものを諦観しながら西欧社会にぶつけていくという戦略にも一直線に</p>

	<p>地続きになっているというのもあるかと思えます。棟方志功などもあの時代においては極めて前衛的な斬新な存在だった訳ですし、もちろん太宰治の文学は永遠の前衛だとは思いますが。正に常に新しいものであり続ける、その新しさ面白さというのは、表面的な情報ではなくて、ある種掘り下げることによって初めて見えてくるもので、その魅力というもの自身を外に発信するということが自体がおそらくは何らかの基本的な探求の途にあるのではないかと思います。</p> <p>文学を掘り下げることと発信することとを連関させていくということは、もちろんなかなか簡単ではないかもしれませんが、確実にありますし、おそらく郷土文学館が意識すべきことのひとつだと感じております。</p> <p>外にアピールするということで、加藤謙一の資料を展示することはすごく良いことだと思うのですが、アニメのメッカとして世界に情報発信するというのは若干苦しくないかと正直思ってしまう所です。確かに少年文化の担い手でありパイオニアである加藤謙一を推すのは良いと思えますし、弘前大学にも加藤謙一文庫がありますので、大学との協力ができるのではないかとと思うのですが、アニメを推し出して、弘前の郷土文学館の広いスペースを使うと、かえって元の文学的な資料の方が損なわれてしまわないかという懸念はあります。アニメは置くとして加藤謙一を生かすことを含めて発信していくという方針で良いのかなと思って拝見しておりました。</p>
委員	<p>研究とアピールが融合していくのは全くその通りだと思います。文学的な視点というのをきちんと掘り下げていくことによって、もっと広い発信力を持ち、この郷土文学館から発信していくような方向で運営していくべきじゃないかと思います。文学「館」と名付けた以上、人に来てもらわないとダメなのです。</p> <p>例えば、宮沢賢治は大変人気のある詩人であり作家です。でも、あの人は岩手県の人じゃないかと言ってしまえばそれでおしまいですが。けれども、北東北全体の風土というように考え直して見比べてみれば、その中で『銀河鉄道の夜』『青森挽歌』というものが、青森県という風土と深く関わっている、そういう視点を弘前の郷土文学館が見つけたよということであれば、全然構わないのではないかと思います。今のは一つの例えですけども、その他の文学者でも、もうちょっと広く深い視点で一つの企画というのを次々と新しく考えていくことによって、ここに全国からお客さんを集めるようにしたい、それぐらいのスタンスでやっていった方がいいと思います。</p>

委員長	弘前をベースにしながらも、より広く柔軟な形で価値を発信していくというお話を伺いましたが、ちなみにサービス向上の具体策である散歩道あるいは朗読会・講演会など、これに類するようなことはこれまでもおそらくはペンクラブの企画でも、郷土文学館でもあったと思います。このような企画で、どれぐらいの人が集うことになるでしょうか。
館長	これからペンクラブさんが企画してどのくらい来るかというのは未定な訳ですが、ペンクラブさんが期待しているのは、リピーターをとにかく増やしていきたいと、リピーターが来て事業に参加する方が固定して、更に新しい方に来てほしいということで、観覧者数の増加を目指していくということです。
委員長	深く興味関心を持って毎回足を運ぶという人を作っていくということが裾野を広げると言えますか、そういうことに繋がっていくという提案ですね。
委員	<p>リピーターという意味では、あそこに行けば必ずこれをやっているみたいな催しを気軽にやっていくということがよいと思います。郷土文学館のホールを使って、音楽会と詩や名作の朗読を組み合わせ、それが毎週土曜日にあるとか、そういう感じにして繰り返し来て頂くようなものがあればよいと思います。その場合には現在活動なさっている方にどんどん出て頂いて、音楽をやっている方は人脈がずいぶんありますので、そういう企画というのも大事じゃないかなと思います。</p> <p>それから、例えば、弘前が北の文学の拠点という考え方で、福士幸次郎や一戸謙三や高木恭造など、そこに北方的な何かがあるじゃないかと共通性を見出して、それが世界の北方に住む詩人たちとどこかで通底するものではないかというように考えています。北欧の詩人や、ドイツの詩人や、イギリスの詩人、そういった緯度の近い所の文化圏の詩人たちとの一緒に抱き合わせた企画は、一般の人あるいはそれこそ全国の人の関心を引き付けると思います。ドイツのヘルダーリンやイギリスのキーツやイェイツや、様々な詩人たちの北の精神みたいなものが、弘前関連の詩人たちと実は似たようなところがあるみたいなテーマの立て方もおもしろいかなと思います。</p>
委員長	<p>弘前というローカルな所からグローバルな所に広げていくという視点だと思います。</p> <p>様々なご意見ご提言頂いておりますけれども、いかがでしょうか。</p>
委員	この指定管理者からの提案抜粋の中の、「文学に関連する他のジャンルに目配りをし」という所に私は目が行きました。というのは、私自身も、文学に入った入口というのはロックンロールの歌詞を聞いたりして言葉

	<p>の強さに目覚め、文学に入っていったという経験があります。音楽好きはイコール文学好きで、文学好きはイコール絵が好きで、絵が好きな人は演劇が好きと、その辺はジャンルレス、ノンジャンルなものとして「文学に関連する他のジャンルに目配りをし」というところはとても喜ばしいと思いました。そこで話がありましたリピーターを増やすためには毎週土曜日には何かをやっている、それが音楽と詩が融合したような企画をやったら良いのではないかということでしたので、それを定期的なイベントにしていけたらと考えました。</p>
委員長	次に、案件5について事務局より説明をお願いします。
	<p>案件5：平成29年度郷土文学館の運営方針について</p>
委員長	ただ今の説明に対しまして、ご質問ご意見等ございますでしょうか。
委員	<p>私は運営委員会に参加するに当たりまして、極端な話、すごく派手なロックコンサートを開いて、それをきっかけに郷土文学館を知ってもらって入館者を増やす、その程度のことしか考えてなかったのですが、他の委員さんの話を聞いて、日常の調査研究をしっかりと質の高い研究をしたうえで郷土文学館を運営していこうという話がありましたので、質の高い研究を期待しております。</p>
委員長	<p>確認させていただきますが、次年度の企画展の内容は既に決まっていますけれども、そこに関しましてはまだ指定管理者のご意見は入らない段階ですね。</p>
専門官	<p>そうです。1月の12日に開会となりますので、図録・展示の内容も出来ております。先程も触れました『青い山脈』は、昭和22年の6月から新聞に発表されて70周年ということで、戦後の暗い世相に新風を吹き込んだという部分だけではなくて、やはり石坂洋次郎が弘前出身であり、その戦後に明るい風を吹き込んだということに加えてもっと深みのある、郷土を描いた『若い人の夢』とか『石中先生行状記』とか面白いものがありますので、新たな魅力というものを紹介しながら、今まで以上に深み・広さのある展示をする予定です。</p>
委員長	<p>ありがとうございます。今具体的なお話も付け加えて頂きましたけれども、いかがでしょうか。</p>
専門官	<p>次年度の郷土文学講座などのイベントについては、また新年度に入ってからになりますので、協力を得ながら進めていきたいと思っております。</p>
委員長	<p>現時点では企画展に限り、新年度からまた新しい方針なども併せて進む感じになると思っております。</p>

委員	ただ映画のポスターのイメージで石坂洋次郎の企画展を1年間展開するのであれば、あまり意味はないです。そこを何とか、1年間を代表する常設展とは違う企画展だということを考えなければと思います。
専門官	今のところ予定しているのは、一般の入り口としては『青い山脈』のポスターということによろしいと思うのですが、今回の展示は石坂の文学というところに視点を当て、『青い山脈』・『青い山脈』以前・『青い山脈』以後という3段構えでいきます。いかに『青い山脈』を生み出すために苦悩したのか、簡単に出て来たものではなく、戦後価値観が大きく変わる中で非常に悩み苦しんだ末に出て来たものであるということから始まり、その『青い山脈』に至るまで横手で非常に試行錯誤していた時代、それから『青い山脈』以後の青春ものから晩年に至るまでいろんな変化を見せている、そういったところを従来に比べてしっかりと捉えて紹介していきたいと考えていました。
委員	70年の風土と変化、環境の変化、そういうものをぐっと表に出すことによって来た人はすごく満足すると思います。例えば『草を刈る娘』の、なぜあんな長い草を刈りがけで刈りに行くのかという疑問がある訳ですが、その疑問に展示室が答えるということです。あの時代とその後の時代の変化というものを一つ一つの代表的な石坂文学に表れている風俗の変化に対比させていくことで、来た人が自分たちの青春と現在との違いみたいなものに、「うーんそうだったか」、「そうなんだよね」、みたいな話です。これは農業の変化にもあるし、それから教育の現場がどんなに変化してしまったかということです。いじめという問題がなぜ今起きているのかということ、そこまで引っ張って来られたら、石坂文学というのも現代の問題から見つめ直すことができるのではないかという感じですが。少し言葉足らずですが、社会学的な視点から資料をきちんと組み立てて見せることができたなら来た人の満足度が違って、そのことによってリピーターが増えると思います。
専門官	今の限られたスペースですので、十分に尽くしてはいないのですが、例えば『暁の合唱』ということであれば女性、職業婦人が増えてきた時代にバスガールをやった人を主人公にしたとか、それから『光る海』であれば新代の性ということを取り上げていったとか、非常に簡単ではありますがそういったものを盛り込んだ形にしますので、今度はご覧になった方に限られたスペース、限られたお金、説明の中でということで解説とか新聞等に発表する文章とか、いろんな場面で展開させていければと思っていました。
委員長	そうですね、まとも石坂洋次郎かという感覚を持たせるというお話も

	<p>ありましたけれども、一方で今の学生で多分石坂洋次郎を読んだことがあるという人は誰もいないと言います。何よりも文庫本がもう全て絶版しています。『青い山脈』でさえ文庫で読めないと気が付いた時には本当に愕然としたものです。今の若者にとって『青い山脈』などが全く魅力がないのかと言うと、授業で扱うと全然そんなことはありません。『青い山脈』の序盤の方、映画の『青い山脈』の初めのあたりを授業で扱うのですけれども、面白いという子がすごく多いです。太宰治に始まって寺山修司までの青森の文学をたくさん扱っている授業の中で、石坂はすごく感触が良いです。ものすごく受けるってということが分かる。あの面白さというものは未だに多分色褪せてないというところがある、トピック自身がある種逆に石坂の、『青い山脈』という作品の知名度、そしてある種のイメージの強さによって何か白雪のように見えてしまっている訳ですけれども、新たな魅力の掘り起こし方は多分様々にあり得るだろうなと思います。とりわけ去年一昨年あたりからでしょうか、ちくま文庫で獅子文六の小説がリバイバルで出されてそれが去年文庫本で相当売れました。三島由紀夫の『命売ります』なんかもちくま文庫は売り出して、去年の文庫売上の中では新しい文庫を差し置いて第1位だったなんて話があります。昭和30年代のある種のエンターテイメントみたいなものが今リバイバルをしているという動きがある中で、石坂の魅力が三島のエンタメやあるいは獅子文六に負けるとは到底思わない、というのが私自身の感触ではあります。そのような形の新たな魅力を持ち得る石坂というものを何らかの形で、もちろんそれは大きい企画展とは別の形の様々な働きかけをやっていくことによって生まれてくるかもしれません。</p>
委員	<p>来年の石坂洋次郎に関してですけれども、どうしてもやはり石坂洋次郎というのは流行作家みたいなイメージを持ってしまっていますし、ちょっと古いものというイメージも持っています。私は『若い人』を読んでみたのですが、ものすごく面白いです。すごく刺激的というか、江波恵子の魅力がものすごく溢れていて、戦後のイメージがあったのですけれども、実は戦前だったと、びっくりするような内容だったので、その時代の風俗とか映画とかのイメージで展示することも大事ですけれども、文学そのものに視点を当てるという展示の仕方にとってもわくわくしています。そして、今文庫本では読めない状況にあるのですが、もしこの郷土文学館に来て、それで石坂面白そう、読んでみたいと思った人は、どのようにその次の日からの読書行動につなげるかというところでは、図書館から借りるしかないし、資料の探し方もよく分からない</p>

	<p>ような人たちもいるので、読書案内というものを付け加えることもあってもよいのかなとも考えました。</p>
専門官	<p>そういう絶版という状況がありますので、代表作10編については、あらすじと抜粋を入れた図録を今作っております。実際の本は文学館では見ることができないので、図書館の方に繋ぐということが必要だと思います。</p>
委員長	<p>それでは、これもちまして、案件5を終了いたします。</p> <p>以上で、本日予定された案件は全て終了いたしました。委員の皆様から、この機会に何かご発言はありますでしょうか。</p>
委員	<p>私たちのスタンスと、実際に管理される方々の関係と言いますか、実際に運営管理される方々も企画を立てられるわけですよね。私たちも回数は少ないですけども、集まった時にこのような形で発言する訳ですけども、それが管理運営される方々に反映されるのでしょうか。</p>
館長補佐	<p>今後の企画展も皆様方のご意見を反映することになります。そして、委員の皆様方のお立場とすれば、館長が今回の企画展あるいは新企画展をこうしていきたいのですが、というものに対して、より具体的なお意見を賜って、新年度の企画展、スポット企画展等に反映されていくものと思います。今後運営することにつきましても広くご提言を頂きたいと考えております。</p>
委員長	<p>他よろしいでしょうか。</p>
委員	<p>私は文学ビギナーなものですので、どうしても文学をあまり読まないような人の立場、そしてそのような人が読むように持って行くような文学館であってほしいと考えました。そのために、やはり派手なイベントを行いたいと考えております。入館者が一番多かったのが誰々の企画展ということもありますし、本当にビギナーの立場で言わせてもらいますと、太宰の没後もそろそろ70年くらいになると思いますが、それを名目として呼びたい人を考えています。</p>
委員長	<p>太宰の没後メモリアルが必ず来ますけれども、それはやはりまた次年度以降の企画ということになって参ります。</p>
専門官	<p>いつも太宰・寺山という訳にはいきませんので、いろんな人に光を当てております。ただ節目の年ということになると、様々な形で取り組むものと考えます。</p>
委員長	<p>それでは、これもちまして第1回弘前市立郷土文学館運営委員会を閉会します。ここで、弘前市立郷土文学館長より挨拶がございます。</p>
館長	<p>(挨拶省略)</p>